「たゆまぬ」

―初稿―

2023/9/10

雨森 れに

〈人物表〉

武田（たけだ） 佑二（ゆうじ）　（３５）　和ろうそくの絵付け職人。圭蔵の養子。

武田　圭蔵（けいぞう）　（７１）　佑二の養父。片足が悪く杖をついている。

吉沢（よしざわ） 香織（かおり）　（６８）　圭蔵の妹。

武田　みき　（享年６６）

〈ログライン〉

和ろうそくの絵付け職人である佑二が、難癖付けてくる養父の圭蔵への殺意を夾竹桃を用いて実行する。

〈ねらい〉

たゆまぬに込めた意味を考えてもらいたい。
たゆまぬ＝弛まぬ。ぴんと張り詰めた状態。
たゆまぬに続けたい言葉……努力、殺意、親愛。

1.

武田宅・庭（昼）

夾竹桃の花が揺れている。

作務衣を着た武田佑二（３５）が縁側でろうそくの絵付けをしている。

2.

同・作業部屋（昼）

和室。敷き布の上に絵付けの道具が並ぶ。

佑二はマスク、薄手のビニール手袋、割烹着（以降、作業着。指定ない場合は作務衣）で乳鉢を使う。

武田圭蔵（７１）が乱暴に襖を開ける。

圭蔵　「いいかげんにしろ。ろうそくなんか作るんじゃない」

佑二　「これは仕事だって言ってんだろ」

圭蔵　「うるさい。定職にもつかずフラフラ遊んで……」

圭蔵、杖で乳鉢を払う。乳鉢が割れる。

佑二、口元を抑えて、

佑二　「おい。やっていいことと悪いことがあるだろ」

圭蔵　「おーおー、職人ヅラだけはいっちょまえだわ。悔しかったら働け」

佑二、圭蔵を突き飛ばして走り去る。

圭蔵は廊下で尻もちをつく。

立とうとするが、なかなか起き上がれない。

3.

同・洗面所（昼）

うがいをし、顔を洗う佑二。

鏡に様子を伺う圭蔵が映る。

佑二が顔をあげ、鏡越しに2人が睨みあう。

4.

同・作業部屋（夜）

作業着の佑二。

白いろうそくにピンクの夾竹桃の花の絵を描く。

畳に布が敷いてあり、そこに夾竹桃の絵が描かれたろうそくが並ぶ。

5.

同・仏間（夜）

小さい仏壇の前にベッドがあり、圭蔵が腰かけている。
仏壇には夾竹桃のろうそく。燃え尽きそうになっている。
圭蔵は嫌そうに新しい夾竹桃のろうそくを取り出し、灯す。
圭蔵、咳をする。

6.

同・庭（朝）

庭木から枝を集め、焚火の準備をする圭蔵。
佑二の絵付けの道具、夾竹桃のろうそくが枝の中に混ざっている。
咳をしながら、火をつける。
× × ×
すべて燃え尽きた焚火跡。
その横で圭蔵が倒れている。

7.

同・外観（夕）

パトカーが一台停まっている。
近隣住民が数名、様子を伺っている。
警官が玄関から出てきて、佑二が続く。
佑二、頭を下げてパトカーを見送る。

8.

同・仏間（夕）

作業着の佑二が窓を開ける。
仏壇に市販のろうそくを置く。
ベッドのシーツ類をはがし、掃除を始める。

9.

同・作業部屋（夜）

作業着の佑二、掃除をする。

10.

同・仏間（朝）

古いシーツ類が取り外されたベッド。

吉沢香織（６８）が佑二から新しいシーツ類を受け取る。

香織　「ユウちゃんはお母さんに似たねぇ。きちんとしてる」

佑二　「父からしたら最後までダメな息子でしたよ」

香織　「しっかりしてないのはどっちだか。すぐ死ぬような量じゃなかったってことだったじゃない？」

香織、ベッドメイキングし始める。

佑二　「いえ、自分が危ないものだと教えておけばーー」

佑二が目頭を押さえる。

香織、佑二の背中をさする。

香織　「もう、あの木は切っちゃいましょうね」

香織、庭の、枝がほとんど無くなった夾竹桃を見る。

１１．同・仏間（夜）

ベッドに圭蔵の遺体。

香織が死に水を含ませている。

香織　「不摂生するから、こうなる」

佑二　「足を悪くしてから歩くだけで体力削られてるようでしたから」

香織　「しかたないことなのかもね。そうだ。あれじゃなくてユウちゃんのろうそくつけてくれない？」

香織、市販のろうそくを指差す。

佑二　「オヤジが知ったら怒って飛び起きますよ」

香織　「起きればいいのよ。毒があるの知らないからって触って燃やして。あげくに勝手に死んで。情けないったら」

佑二　「そう言ってくれるの、香織おばさんだけです」

佑二、微笑む。

香織　「みきさんも生きてれば同じこと言ったと思うよ。ほら、ろうそくのこともよく圭蔵と喧嘩してたし」

佑二　「母さんはずっと味方でしたね。死ぬ時もオヤジに仏壇のはユウ以外がやったのはだめだって……」

香織　「（驚いて）みきさんの言うことも聞いてなかったってこと」

香織、市販のろうそくを見る。

佑二、頷く。

香織　「ユウちゃん。自分のろうそく持ってきなさい。私が許すから」

× × ×

佑二、部屋に戻ってくる。

手には大きな木箱。中に絵付け済みのろうそくが入っている。

香織　「きれい。みきさんから聞いてたけど、こりゃすごいわ」

佑二　「母さんはピンクの花がお気に入りでしたね」

香織　「ピンクっていうと……桜、牡丹、梅、これはカーネーション？」

佑二　「母の日が来るとつい」

香織　「いいじゃない。今日はカーネーションにしましょ。圭蔵はあの世でみきさんに怒られればいいの」

香織、仏壇のろうそくを佑二のものと交換する。

佑二、圭蔵の遺体を見て、にやりと笑う。

12. 同・作業部屋（朝）

佑二、押入れの奥から箱を出す。

蓋をあけると使い込んである絵付けの道具。その上に手紙。

手紙の中身を読む。

目を閉じ、空を仰ぐ。

それからゆっくりと敷き布の上に道具を並べていく。

香織が部屋に入ってくる。

香織　「ユウちゃん、お道具無事だったの」

佑二　「あ、あぁ。予備ですよ。よく使ってたのは、警察の方が言ってた通り、燃やされました」

香織　「予備あってよかった。圭蔵が燃やしただろうって聞いた時は頭に血が上るかと思ったの」

佑二　「それより、香織おばさんに話さなきゃなことあって」

香織　「財産分与ならユウちゃんの好きにしていいけど……」

佑二　「いやいや。違います。自分、老舗ろうそく会社の園村堂で専属職人として採用されることになったんです」

香織、目を見開く。

香織　「それってすごいことなんじゃないの？」

佑二　「何度も試験受けて、ようやくです」

香織　「圭蔵に聞かせてやりたい」

佑二　「きっとそれでも怒りますよ」

香織　「そうかもしれないけど……ずっと努力してたんでしょ。すごいことよ」

佑二　「和ろうそくもですけど、アロマキャンドルまで作れるようになりましたよ。材料を練りこんで作るんです」

香織　「はぁー、そういうたゆまぬ努力が結果に結びつくもんよね。今度私にもアロマキャンドル作ってよ」

佑二　「……あまり頻繁に嗅ぐと体力削られちゃうと思うんで。香織おばさんには絵付きろうそくを沢山送りますよ」

香織、嬉しそうに笑う。

香織　「じゃ、そろそろお坊さん迎えに行きますか」

佑二、香織、部屋を出ていく。

押入れの天袋の中。ビニールに包まれた枝と乳鉢。

13．同・廊下（朝）

幸せそうに笑う佑二の横顔。

おわり